

第 I 部／保育科夏期ゼミナール

< 第 42 回夏期ゼミナール 報告 >

令和 6 年 8 月 3 日 (土)
常葉大学草薙キャンパス
参加人数 101

I 基調講演「遊びにおける指導の充実」

講師 砂上 史子 先生
千葉大学教育学部乳幼児教育コース 教授

皆さん、こんにちは。千葉大学の砂上と申します。よろしくお願いします。今日はこちら、静岡の常葉大学短期大学部にお招きいただきまして、地域の先生方と一緒に保育、特に遊びを通しての指導と一緒に考える機会をいただけたことを嬉しく思っています。

夏季中も先生方は保育があり、暑さもあって大変かとは思いますが、園から離れた所で保育を考えたり語り合ったりすることが、先生方にとって良いリフレッシュになればとも思っています。今日はよろしくお願いします。

1 日本における幼児教育の動向

令和の日本型学校教育

それでは、資料に沿って、お話ししていきたいと思えます。まずは、幼児教育の動向をお話したいと思えます。お手元の資料をご覧ください。先生方もご存じの内容もあるかと思えますが、「令和の日本型学校教育の実現に向けた取り組み」として、令和 3 年度に、文部科学大臣から提出された資料です。情報量の



こども家庭庁 こども家庭審議会 (2023)
「幼児期までのこどもの育ちに係る基本的なビジョン(はじめての100か月の育ちビジョン)概要」

多いスライドですけれども、赤字になっている所が1カ所だけあります。「全ての子どもが格差なく、質の高い学びへ円滑に接続」という、この部分が唯一、赤字になっています。「デジタルならではの学びの推進」と「リアルな体験を通じた学びの推進」を掲げ、デジタルとリアルを組み合わせつつ、より効果的な教育を行っていこうという方向性があり、その土台として、幼児期からの学びの基盤づくりが謳われています。具体的には、「幼保小の架け橋プログラム」なども挙げられています。

そのためには、教師等の指導体制の充実、資質向上が重要であるとしています。幼児教育を支える保育者の確保、資質・能力向上ということが、より一層、重要になっています。したがって、本日の夏期セミナーのような機会も、まさに、先生方の資質・能力向上に関わっています。「全ての子ども」というところに、「日本人学校の子どものも含む」と書いてあります。この部分は、幼稚園、保育所、認定こども園、また、小規模保育施設、さらには施設には通わない子どもも含めて「全ての子ども」としています施設主等は問わず、全ての子どもを対象にしている点が、特に重要です。

幼児期までのこどもの育ちに係る 100 のビジョン

もう一つ、令和5年にこども家庭庁が創設されて、『こども大綱』や、子ども政策の基本的な方針となる方向性が打ち出されています。その中で、「幼児期までのこどもの育ちに関わる基本的なビジョン」、通称『はじめての100か月の育ちビジョン』が出されています。『はじめての100か月とは』が左下に書いてある通り、妊娠期から幼保小接続の時期までのおおむね100カ月を指しています。この時期が特に、生涯にわたるウェルビーイングにとって重要だと考えられています。ウェルビーイングは、身体、精神的、社会的に幸せな状態で、バイオ、サイコ、ソーシャル、この三つが絡まり合って、子どもの幸せを構成するとされています。

子どものウェルビーイングのために、こども基本法の理念に則り政策を進めるための5つのビジョンが示されています。『こどもの権利と尊厳を守る』、『安心と挑戦の循環』を通してこどものウェルビーイングを高める』『こどもの誕生前』から切れ目なく育ちを支える』『保護者・養育者のウェルビーイングと成長の支援・応援をする』『こどもの育ちを支える環境や社会の厚みを増す』です。

「安心」と「挑戦」の繰り返し

5つのビジョンはどれも保育、幼児教育に深く関わっていますが、特に今日のテーマは2番目のビジョンである『「安心と挑戦の循環」を通してこどものウェルビーイングを高める』と深く関わっていると思います。これも、こども家庭庁の資料になりますが、この2番目のビジョンで、乳幼児の育ちには、「安心と挑戦の繰り返し」が大切と言われています。安心というのは、「アタッチメン」「愛着」、つまり不安なときに身近な大人が寄り添ってくれて安心感がもたらされる経験を繰り返すことで、「安心」の土台とも言える基本的な信頼感が育まれる。それを土台として子どもは周囲の環境に積極的に関わり、遊び、様々な経験をし、外の世界に挑戦していきます。このような循環が大切ということですね。外の世界に挑戦しに行っても、思い通りにならない、怖い思いをすると、また頼れる大人の所に戻って安心する。そこで安心すると、もう一回、頑張ってみようとか、今度はこんなことやってみようというふうに、再び外の世界に挑戦していく。この循環を、繰り返し繰り返し、たくさん経験していくことが、保育の中でも必要になってきます。保育はもとよりこれらのことを大切にしています。安心はどちらかっていうと養護的な側面に関わる、生命の保持とか、情緒の安定に関連しています。挑戦は、教育的な側面とか、環境を通して、さまざまな経験して学びを深めていくことに関連しています。そのように考えると、両方をバランスよく、発達に応じて、どう保障していくかが重要になります。

今日のゼミナールのテーマでもありますが、子どもが遊ぶときに、そこに挑戦や育ち、学びがうまれているかという点を我々はしっかりと捉えていかななくてはならないと思います。さらに、それらを生み出すための、手立て、援助や環境構成を考えていく必要があります。

いろいろなものが便利になり、また子どもの生命の保持や安全のことを考えると、挑戦や冒険が、現代の子どもの生活では難しくなっているところもあるかもしれません。挑戦や冒険は、言葉としては存在するけれど、そのような経験を子どもたちができているのかを、我々は考えていかななくてはなりません。

保育の質（Child care quality）とは何か

次に、少し大きな話になりますが、保育の質の重要性についてお話しします。先ほどの学びの基盤づくりのためには、質の高い保育を行うことが重要になります。保育の質と子どもの育ちに関わる話は、先生がたもさまざまな所でお聞きになっていると思いますが、保育の質は、国際的には概ね共通理解が図られ、最大公約数的なところは明らかになってきています。保育の質は、大きく分けると、「規定的な特徴」と「プロセス的な特徴」に分かれます。

保育の質—規定的特徴—

規定的な特徴は、構造的な特徴とも呼ばれます。大人と子どもの人数の比率、グループの大きさ、保育者の教育レベルなどです。大人と子どもの人数比率に関しては、日本は保育者1人当たりの子どもの数が多いと言われ、グループの大きさも、国際的に見て集団の規模が大きいと言われています。最近、保育所の配置基準が見直されましたが、保育者にとっても子どもにとっても適正な人数を考えていく必要があります。

グループの大きさに関しては、日本の保育は、従来から、集団での育ち合いを大切にしています。今後、さらに少子化が進むと考えた場合、集団の人数の上限よりは、下限を検討する議論が、重要になってくると思います。

特に、幼児期後半の4歳、5歳には、集団での様々な経験や、子ども同士の育ち合いが重要になってきます。行事を展開していくにしても、さまざまな遊びをするにしても、最低クラスに何人の子どもの必要なのかを議論する必要が生じてくると思います。園生活には行事やさまざまな活動があります。例えば、ドッジボールやサッカー、生活発表会、話し合いなど、いろいろな活動を考える際に、どのくらいの人数が適正であるのかを検討することが必要になってきます。ある程度の人数がいれば、様々な子どもがいるので、多様な出会いや多様な関わりが生まれやすいと言えます。そのような視点が今後必要になってくると思います。子どもの人数は少なければ少ないほど良いという、単純な話でもなくなってくると思います。

保育者の教育レベル。これは単に学歴という意味ではなく、先生方が就職した後、どのくらい学び続けているかが、とても重要になります。本日のような夏期セミナーなど、先生が様々な形で学び続けていることで子どもの発達も良くなると言えます。

保育の質—プロセス的な特徴—

規定的な特徴もとても重要ですが、保育の質の中核は、先生と子どもの実際の関わり等である、プロセス的な特徴と言われています。一言でまとめると、「ポジティブな養育」「ポジティブケアギビング」が多いと、保育の質が高いと言われています。スライドに10項目程、具体的な内容が挙げられています。ポジティブな態度とか、身体接触などは、保育所保育指針であれば「温かく応答的に」「受容的」「愛情

深く」といった表現とつながっていると思います。これらは、先ほどの安心ともつながります。保育者は温かく受け止めてくれる、必要に応じて身体接触してくれることで、子どもの安心感が育まれていくと言えます。

その他、「子どもの発声や発話に応答する」「質問する」「話しかける」といった応答がとても重要になります。応答性は、保育者の専門性としてとても重要です。今日のテーマである「遊びを通しての指導」を考えていく際にも、保育者が応答に関わるのが重要です。応答的の反対は、一方的です。子どもに対して愛情を持ち、子どもに良かれと思って関わるとしても、それが子どもにとって一方的であるならば、その関わりは保育として「質が高い」とは言えないということです。一人一人の子どもの、その時々ニーズを読み取ってそれに対して応じるということが応答的ということです。その点に保育者の専門性があると言えます。

「発達を促す」。この例が「パズルをする手伝い」や「自分でチャックが閉められるように励ます」など、とても具体的内容になっています。このような具体的な、ちょっとした関わりの中に、発達を促す契機があることを、保育者が分かっているかどうかで、保育の質が変わってきます。登園から降園までの園生活全体を通して子どもを育てていくことが、保育の根本的な特徴です。したがって、発達を促す契機、チャンスは、園生活の至る所にあります。例えば、自分でチャックが閉められるようにする場合、子どもは自分でできない時は、おそらく保育者に「やって」と甘えてきたり、あるいは、チャックを閉めないまま遊んでいたりすると思います。子どもが「先生、やって」と来た時に、何も言わずに無言でカチャッとチャックをはめて、ピーっと閉めてしまうのと、「これ、ちょっと難しいよね。カチャッってやるところは先生がやってあげるから、ピーって、〇〇ちゃん引っ張って上げてごらん」と言うのでは違いますよね。その関わりが、子どもにとってそこが発達促進的であるか、子どもが自立に向かうような関わりであるかという点において、差が出てくると思います。したがって、そのようなことを子どもに応じてやっているかどうかで、保育の質としてとても重要になります。「パズルをする手伝い」も、放っておけばそのうちできるようになるという側面もあるかもしれませんが、年齢が低いと上手くできなかったり、上手くできるにしても保育者に傍で見ていて欲しい、保育者に見ていてもらえると安心できると・意欲的になれるということがあります。あるいは、最初は子どもは手当たり次第に、パタパタとパズルを置いてるけれど、保育者が一言「ここ、丸くなってるね」とか「ここ尖ってるね」などと言うことで、パズルの形に注目するようになるのかもしれませんが。パズルのピースをくるくる回してみるなども同様です。そのようなちょっとした関わりを保育者が遊びながら盛り込んでいくことで、子どものパズルの仕方が変わってきます。言葉も同様で、子どもは知らないかもしれないけど、保育者ががさりげなく使うと、その言葉が子どもに獲得されていきます。そこで発達が促されているのだということを確かめていけると良いと思います。

「読む力を伸ばす」に関しては、子どもの学力に何が強く影響する強い要因としては、読み聞かせが挙げられます。保育所や幼稚園の良いところは、保育者がいつも絵本を読んでくれる、毎日読んでくれる点にあります。また、子どもが自分で好きな本に、自分のペースでいつでも触れられることも、保育所や幼稚園、こども園の環境としてとても重要です。子どもにページをめくらせるとか、そういうこともすごく大切です。園に置いてある本は、しわが付いたり、ボロボロになったりしますが、そのくらい自由に子どもが絵本に触れ、親しんでいること自体が、とても大切なことです。もしかすると、親御さんから、家庭で絵本を読んであげるけれど、子どもが自分で勝手にページをめくるとか、いつも同じ本ばか

り読んでいるなどの相談があるかもしれません。しかし、そういう風に自分でページをめくろうとすること自体がすごく大切なことですよ、同じ話を何回も読んで欲しいのは、それだけその子どもの中にそのお話がしっかり入っていることですよ、それは実はものすごくよいことなんですと、親御さんに言ってあげることが保育者の役割だと思います。慣れ親しんでる本でも、お母さん、お父さんに読んでもらうのは子どもにとってとても特別なことなんですとか、そういうアドバイスができるのは、保育所、幼稚園、こども園の保育者だと思います。そのような子どもの姿の中にその後の学びに繋がる大きな意味があるということを保護者の方に分かるように、保護者の方が自信を持てるように、伝えられると良いと思います。

あと、否定的な関わりを回避する。先に述べたこども家庭庁の「はじめの 100 か月」のビジョンなどでも、子どもの人権や尊厳が強調されています。昨今、残念なことに、「不適切保育」という言葉も出てきていますが、怒鳴るとか無視するとか、体罰とか、そのようなことは先生方は当然しないと思います。しかし、何事にもグレーゾーンがあり、子どもに対する言い方や関わり方において際どいものもあると思います。その点は常に振り返りが必要です。もっと違う言い方、もっと良い言い方があるのではないかと考えていくことがとても大切だと思います。

園生活の中で、ある活動から次の活動に動く移行場面は、特に先生方が苦勞する場面だと思います。例えば、遊んで片付けてからおやつを食べるといった場面で、子どもがなかなか片付けをしない場合に、「片付けないとおやつあげないよ」みたいな言い方は、それはダメだということは、我々は分かると思います。一方で、冗談半分で「〇〇ちゃんがお片付けしないんだったら、先生がおやつもらっちゃおうかな」みたいなことを言うことがあるかもしれません。ただそれは、先生は冗談で言っているということを子どもがちゃんと分かっていることが、前提になります。保育者が「私は冗談のつもりだった」と思っている、その言い方で子どもが不安になったり、急かされたりする気持ちになるとしたらその言い方はあまり質が良い言い方でとはいえない、もっと別の言い方を探るべきであるということになります。

あるいは、保育者と子どもたちの間ではそれが冗談であることがわかっていて、普段からそのようなやりとりが漫才のように、掛け合いみたいに行われていたとしても、保護者の方や地域の方がそれ聞いたときに、どう思うかということとはまた別の話であると思います。園外の公園で遊んで、園に帰る時になかなか帰ろうとしない子どもがいた時に、「〇〇ちゃんおいていくよ」とか「〇〇ちゃんひとりぼっちになっちゃうよ」みたいなことは、我々はわりと言いがちであるように思います。昭和の時代は、そのような言い方が普通にあったなぁと懐かしく思い出すぐらいかもしれません。しかしい、今の時代に、その言い方ではたして良いのだろうかと考える必要があります。もっと違う言い方、もっと子どもの気持ちが動くような言い方を工夫するのが、保育者の専門性ということになります。その点をぜひ、先生方にも意識していただいて、言葉かけを工夫してほしいと思います。地域の方が、たまたま公園で保育所の先生の子どもの関わり方を見て、「なるほど、やっぱり保育所の先生は子どもとの関わり方上手だな」「ああいう風にして子どもの気持ちを掴んで、自然と園に帰るようにしていくんだな」と感心するような言い方を工夫していくことがとても大切だと思います。

II 保育の質と子どもたちの育ち

保育の質を考える際に、国が定める基準は、「最低基準」という言葉にもあるように、一番下のとこ

ろを定めているということを意識することが重要です。国の基準は、「これより悪くはならないようにしてくださいね」というもので、その上限は決めていません。保育の質に上限はないということです。今、先生方は良い保育されていると思いますが、もっと良い保育、もっと良い関わり方があるはずだと思って、質の向上を貪欲に追い求めていくことがとても重要だと思います。

1 保育の質と子どもたちの育ち－英国 REPEY 調査－

英国の縦断調査では、優れているプリスクール（幼稚園、保育所、こども園）の特徴を挙げています。その特徴は、「保育者の子どもへの関わりが温かく応答的であること」「共に考え深め続ける、Sustained Shared Thinking」などです。共に考え深め続けることは、あまり聞き馴染みないかもしれませんが、そんな難しいことではなく、2人以上が、一緒に活動に取り組んで、一緒にある問題について考えていくということです。

子どもが遊んでいる時には、考えるはたくさんあると思います。積み木で家を作っているときも、屋根をつけたいと考えて、「先生、屋根をつけたい」と言うかもしれません。その時に、「どういう屋根がいいかな」「三角の積み木を置いたら屋根に見えるかな」と保育者が言うと、子どもが「そうじゃなくて、テントみたいにしたい」と答える。そこで「何を使うとテントになるかな」と保育者が問いかけて、子どもと一緒に考えるというようなことです。そのような関わりを通して、子どもが思考力を働かせたり、言葉で伝えることが促されたりしていきます。すぐに答えを教えるのではなく、子どもと一緒に考えるということが大切です。

優れてるプリスクールほど、子ども主導の遊びや活動を、子ども中心で、教師がつなぎ発展させる遊びや活動が多いとされています。子どもが主体的に活動を展開することは、平成元年改訂の幼稚園教育要領から30年以上、日本の幼児教育の基本となっています。国際的にも、そのような幼児教育の在り方がスタンダードであり、質が高いということを先生方に、今一度、確認していただければと思います。

2 幼児教育への投資の効果

質の高い幼児教育を通して、何が特に育つのか、育てるべきかという議論に関して、ノーベル経済学賞を受賞したジェームズ・ヘックマンの『幼児教育の経済学』という本があります。その本の中で、幼児教育への投資効果が述べられています。ヘックマン自身は幼児教育の専門家ではなく、経済学者で、人材育成を専門にしています。どの時期にどのような教育にお金をかけると、より効果的に人材が育つかを検討しています。そのヘックマンが辿り着いた一つの答えが、質の高い幼児教育が、人を育てることと、世の中を良くしていくことの両方において、投資効果が最も高いということです。幼児教育を受けた本人だけでなく社会に対しても効果が大きいというのは、質の高い幼児教育プログラムへの参加が将来の所得の向上や、社会保障費の抑制等につながることを意味しています。

このヘックマンの主張の根拠になっているのは、「ペリー・プリスクール・プログラム」です。これは、1960年代のアメリカ、ミシガン州の低所得層のアフリカ系アメリカ人3歳児で、学校教育上のリスクが高い幼児のうち、質の高い幼児教育を実施した幼児と、未実施の幼児という二つのグループを追跡調査したものです。14歳時点の学力では実施したグループの方が成績が良かったのですが、学力の差は年齢が上がると消えているとも言われています。しかし、大人になってからの年収や生活保護受給率などの結果においても、質の高い幼児教育を受けたグループのほうが、良い結果でした。このことから、従来から考えられている以上に、幼児教育は人生全般に対して、生涯にわたって、肯定的で継続的な影響を持つことが明らかになりました。では、どうしてそのような魔法のような素晴らしいことが起こっ

たのかということについて、ヘックマンは、質の高い幼児教育を通して、幼児期に非認知的能力、つまり社会や学習に対する前向きな傾向である自律性とか、協調性、創造性、問題解決能力、粘り強さを獲得するからだと考えたわけです。質の高い幼児教育にお金をかけることの効果について、「幼年期に投資された1ドルの投資効果は、後年になって投資された1ドルの投資効果よりも高い」というふうに言っています。

3 ペリー・プリスクール・プログラムにおける質の捉え

ヘックマンが投資効果の研究を行ったペリー・プリスクール・プログラムの中で用いられた「ハイスコープ・カリキュラム」は、今でも、アメリカを中心に、世界各地で行われてはいます。これはその本の表紙とか、教材のカatalogの表紙です。見ていただいて分かるように、電車のおもちゃで遊んでいます。1このような子どもの姿は日本の幼稚園や保育所等でもたくさん見られると思います。ハイスコープ・カリキュラムでは、基本的にはアクティブラーニングを行っています。子どもが自分でこれやりたいと選択した活動も、自由に行う、つまり遊ぶということを大切にしています。したがって、幼児期よりももっと高い発達段階の内容を先取りして教える早期教育とか英才教育ではないということです。遊びに通じるアクティブラーニングを中心とする教育です。

ペリー・プリスクール・プログラムで、幼児教育の質の高さについて示している図です。大人の能動性と子どもの能動性の2軸による4象限で示しています。この図から「質が高い＝High Quality」とは、大人も能動的で子どもも能動的であると言えます。とすると、子どもが能動的、主体的であるためには、大人の能動性は引っ込めておかななくてはいけないというような二項対立的な捉え方をしがちです。しかし、そうではなくて、子どもが主体的であるときには、大人もまた計画を立てたり、援助をしたりなどさまざまな形で能動性、主体性を発揮していると言えます。

大人の能動性は、直接援助するだけではなく、見守ることや物の配置などの消

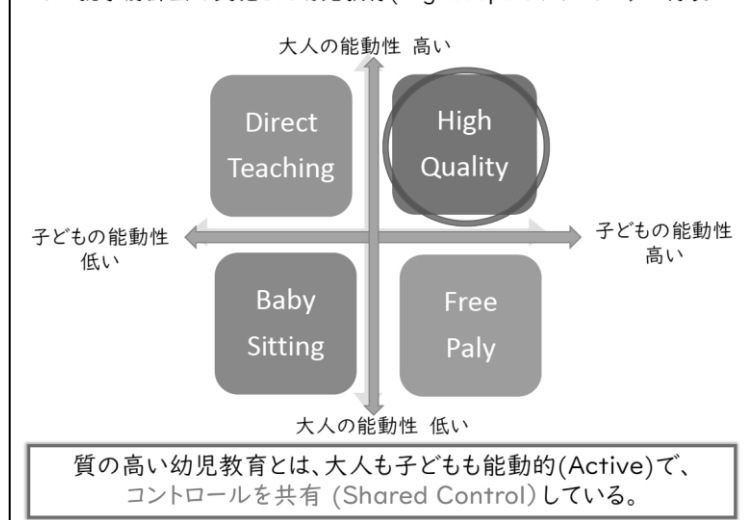
極的な援助や間接的援助の際にも発揮されます。大人がよく考えた上で意識的に行うのであればそれは能動的であると言えます。そこで、質の高い幼児教育とは、大人も子どもも能動的で、コントロールを共有、つまり「シェアードコントロール」と言う状態であると捉えることができます。

4 ハイスコープ・カリキュラムにおけるアクティブラーニングの5要素

ハイスコープ・カリキュラムは、先ほど述べたように、アクティブラーニングをとっても大切にしています。子どもが自分で活動を選び、直接物や周囲の環境、人と関わって展開する活動であるアクティブラーニングには、5つの要素があります。

「環境構成・教材研究」に関わるのは、「教材」「操作」「選択」です。「教材」の箇所です、「多様で発達に応じた、十分な量の教材を提供する。教材は全ての場面にある、かつ、オープンエンドである」とあります。オープンエンドとは、使い方が決まってないという意味です。したがって、子どものアクティ

ペリー就学前計画で実施した幼児教育(Highscopeカリキュラム)の特長



ブラーニングを引き出すには、使い方が決まってない素材がたくさんあることが大切です。例えば、砂場の砂、空き箱、積み木があてはまります。葉っぱや石ころなどの自然物も、様々な使い方ができるオープンエンドな素材であると言えます。

それらの教材を実際に子どもが試したり、合体させたり、変形させたりすることが「操作」です。自分自身が手で触れるだけでなく、頭の中で操作することも当てはまります。子どもが実際に操作をすることが保証されている

ことが重要です。教材はあるけれど、使い方を大人が決めてしまって、子どもが自分で操作する余地がないと、アクティブラーニングとして乏しいものになってしまいます。

子どもは自分の興味やニーズに沿って、教材や活動、遊び相手を選びます。そこに子どもの選択が入っていることがとても大切です。

また、保育者の「援助」に関わるのは、「子どもの言語と思考」「大人の足場かけ」の箇所です。子どもが感じたり考えたりしたことをなどを言葉で表現することが重要です。それを、保育者が少し修正をしたり広げてたりすることが、「足場かけ」になります。

「足場」というのは、工事現場の足場と同じ意味です。子どもが今考えていることや理解していることと、少し支えがあれば次の段階に進めることがあって、保育者が支えることで前者を緩やかに拡張していき後者となるよう促していくことが「足場かけ」に当たります。子どもと一緒に考えながら、子どもの今現在の段階を受け止めつつ、次の段階に上がれるように、保育者が提案したり質問したり、言葉を補ったりすることが大切です。それが発達を促進することに繋がります。

さきほど、非認知的能力に触れました。実際の園の様子を例に挙げて、説明したいと思います。これはある園の5歳児が園庭に巧技台を出して、遊んでいます。こんなふうに自分たちでコースを作って、順番に並んで、渡っています。また、給食時には、子ども達自身で机を出して給食を食べる準備をしていました。このように重そうな机も、子どもだけで運んでいます。また、給食当番の子どもは頭巾とエプロン着けて配膳をしています。他の子は順番に並んで、自分のトレーに給食を載せていきます。ちょうどこの日はラーメンだったので「多い」「少ない」などと言いなが給食を配膳したり運んだりしていました。

我々は、保育を場面や活動で見ることに慣れているので、このような様子を見ると、「戸外で巧技台で遊んでいます」「給食の準備をしています」「給食当番をやっています」と言います。しかし、この場面で子どもが発揮している力とか、育まれている資質能力に注目すると、「友達と協力する」「ルールを守る」「責任や役割を果たす」というふうに捉えられます。つまり、幼稚園や保育所などの5歳児くらいになると、「協力する」「ルールを守る」「役割を全うする」ことが育ってきている、そのような経験をしているというふうに読み取ることが重要です。そのような力を伸ばしていると目で見ることが大

ハイスコープ・カリキュラムにおける アクティブラーニングの5要素	
環境構成・教材研究	1. 教材 プログラムは、多様で、発達に応じた十分な量の教材を提供する。教材は、すべての場面にあり、かつオープンエンドである。つまり、それらは多様な方法で用いられ、子どもの経験を広げたり彼らの思考を刺激したりするのを助けるものとなる。
	2. 操作 子どもは教材と考えを操ったり、試したり、合体させたり、変形させたりする。彼らはこれらの教材を手で直接触れたり、「頭の中で」操作したりすることを通して発見する。
	3. 選択 子どもは、自分の興味やニーズに沿って教材や遊び相手を選び、遊びに対する考えを変え、作り上げる。そして活動を計画する。
援助	4. 子どもの言語と思考 子どもは、彼らが現在進行形で行なっていることや理解していることを言葉で述べる。彼らは、自分の行為について考えながら言語的かつ非言語的にコミュニケーションを図り、新たな学習を考慮してその考えを修正する。
	5. 大人の足場かけ 足場かけとは、子どもの現在の考えることと理解することのレベルを支え、穏やかに拡張することである。この方法では、大人は、子どもが知識を獲得したり創造的な問題解決のスキルを発達させたりすることを助ける。

(Epstein, 2014を翻訳)

切です。

そして、「協力する」「ルールを守る」「役割を全うする」というこれらの三つの力は、この5歳児の子どもたちが成長していく過程で要らなくなることがあるのだろうか、と考えてみると、要らなくなるどころか、生涯にわたってずっと重要な力であり続けるわけです。そのような力を、ヘックマンは「非認知的能力」と呼び、心理学では「社会情動的スキル」というふうに呼んでいます。このように生涯にわたってとても重要な力を、幼児教育は育てていることから、投資効果が高いと考えられるわけです。したがって、園生活の中で、子どもたちがそのような力をどの場面でどのように発揮しているか、どうしたらそれを伸ばせるのかということ、を考えていくことが重要になります。

幼稚園や保育所で行っている活動、給食当番や巧技台の遊びなども、発達段階が上がれば、それらの活動自体はなくなっていきます。受験の科目になるわけではありません。しかし、それらの活動を通して得た力は、ずっとこの人たちを支えていくという捉え方が、必要になります。幼い時に友達と一緒に重い物を持った経験があるということは、とても素朴なことですが、とても重要なことですよね。そういう経験をせずに「協力します」「協調性があります」と言っても、それは「絵に描いた餅」ではありません。具体的な経験を通してそれらの力を育てていることがとても重要です。

これは、また別の園の砂遊びの場面です。すごく水はけの良い砂場なので、子どもが1人ずつ水を流しても全然「川」ができないため、みんなで一緒に「ばしゃー」と水を流してみたらどうだろうと考えて、みんなで一斉に水を流している場面です。こういう姿はどの園でも見られる姿だと思います。手前にいる男の子も、みんなで一斉に水を流す活動に参加したいと思いました。でも、参加するには、水を汲んでくるためのバケツが必要です。その時、空いているバケツはありませんでしたが、湿った砂が入った誰かが放置していったバケツがありました。そこで、この男の子はそのバケツの砂をかき出しているところです。ここで子どもがしていることは「砂遊び」で、この男の子はバケツから砂をかき出しているだけであると言えますが、ここでこの男の子が発揮している力は、まさに自分で目当てを持って、何か成し遂げようとする力、自律性や粘り強さということになります。

遊びだから子どもは好きなことばかりして、我慢をしていないということではなく、むしろ、遊びの中でやりたいことに会った時には、自分なりに頑張ったり、粘り強く取り組んだりする姿が自然と生み出されます。遊びを通しての指導が重要だというのはその点にあります。遊びの中で、子どもは意外と厳しい状況に直面して、子どもなりに頑張ることが自然と引き出されます。では、どうして頑張れるかということ、自分がやりたいことだからですよね。自分も友達と一緒に水を流したい。だから、ちょっと頑張ってみることができるわけですね。

このような砂場に水を流して川を作るというのは、どの園でも見られると思いますが、このような経験ができるのは、幼稚園や保育所、こども園だからこそだと思います。少子化で、これだけの人数の同年代の子どもが集まることも、現在では、どんどん少なくなってきています。一人ではできないことも、みんなと一緒にならばできる、みんなと一緒にならば楽しいという経験が、その後の協調性や社会性などの土台になっていきます。

そして、この場面には保育者もいます。保育者がどんなふうにして、子どもの活動を支えているのかというところに注目することも大切です。また、環境として、どのような物があるのかも重要です。このような砂遊びは大人になれば行わなくなっていくと思いますが、その中で培った力、粘り強く自分の目当てに向かって取り組む力は、その人の土台になっていきます。保育者がそういう目で、子どもの遊びを見て、

その遊びを通して何が育っているかを捉えることが大切です。

Ⅲ 遊びを通した学びの意義

1 ナショナルカリキュラムにおける遊び

遊びを通した指導の意義に関して、これはあるアメリカの幼稚園の職員室かどこかのドアを開けた所に貼ってあった言葉です。『Play is the highest form of research.』という言葉の下にアルバート・アインシュタインとあります。日本語に訳すと「遊びは最も高度な研究の形である」という意味になります。また、同じアメリカの幼稚園で、『Children need the freedom and time to play.』という言葉が掲示してありました。子どもには遊ぶための自由と時間が必要である、とあります。続けて、『Play is not a luxury. Play is a necessity.』と書いてあり、「遊びは贅沢品じゃなく、必需品だ」とあります。これは、臨床心理学者の人の言葉です。この言葉の通り、遊びは子どもにとって必需品と言えます。アメリカの幼稚園には、このような箴言というか、良い言葉が室内に貼ってあります。

ここから先は、先生方は十分ご存じなので、あんまり詳しくは言わなくても良いと思いますが、現在の幼稚園教育要領においても、「自発的な活動としての遊びは、心身の調和の取れた発達の基礎を培う重要な学習である」と述べられています。このことが総合的に達成されるようにとも述べています。また、幼稚園教育要領解説でも、遊びに関しては、「遊びは遊ぶこと自体が目的であり、人の役に立つ何らかの成果を生み出すことが目的ではない。しかし、幼児の遊びには幼児の成長や発達にとって重要な経験が多く含まれている」とあります。

この点が、幼児教育において遊びを指導することの難しさでもあり、われわれが注意しなくてはいけないところでもあります。子どもにとっては、遊びはそれ自体が目的であって、遊びを通して何かを育むもうという意識は子ども自身にはない。さきほどの砂遊びをしていた男の子も、砂遊びが好きだから、みんなと一緒に川を作って水を流したいという、それだけを目的として活動していたと思います。ただし、その活動には発達にとって重要な経験が含まれていることは、大人は分かっています。それでもやはり、子どもにとっての遊びということを考えると、子どもの遊んでいる心理状態は、重視されなくてはいけないということになります。

同様に、保育所保育指針解説でも同じようなことが書いてあります。「遊びには子どもの育ちを促すさまざまな要素が含まれています。ただし、遊びはそれ自体が目的となっている活動で、遊びによっては何よりも、今を十分に楽しめることが重要です」と。ここはとても重要なフレーズだと思います。子どもにとっては、今を十分に楽しむことが大切であって、将来のためになどと子ども自身は考える必要はないということです。ただし、「夢中になって遊んだ充実感や達成感。時には疑問や葛藤が、意欲や態度の源になっていく」とも述べています。

2 保育学・発達心理学等の遊びの定義

保育学とか、発達心理学等での遊びの定義においては、子どもの心理状態を、とても重視しています。かつて、平成元年以前の「6領域」の時代には、「〇〇遊び」とは称しているけれども、大人がほとんど指示してやらせているという状況もありました。そのような状況への反省という意味でも、子どもの心理状態を重視するということがあります。その場合、まずは、子どもの自発性、内発的動機付けが重要です。また、楽しさなどの快の感情を伴うことも遊びの条件となります。さらに、活動自体が目的であること、何らかの手段ではないということも条件となります。一方で、「課題」と書いてあるように、

この三つの条件で遊びを定義づけることは可能ですが、それぞれに課題があります。一つは、子どもの主体性と保育者の意図のバランスです。こどもの自発性だけに任せると、経験の偏りが生じます。保育者が何らかの意図を持って働きかけることも必要になってきます。ただ、保育者の意図が強過ぎると、子どもにとっては自発的な活動でなくなるという難しさがあります。その解決方法の一つとして、教材や環境を、子どもにとって魅力的なものにしていくということがあります。

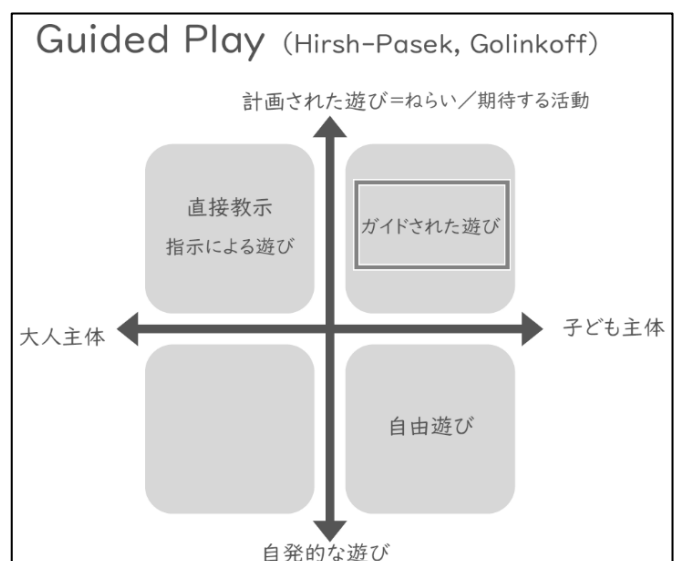
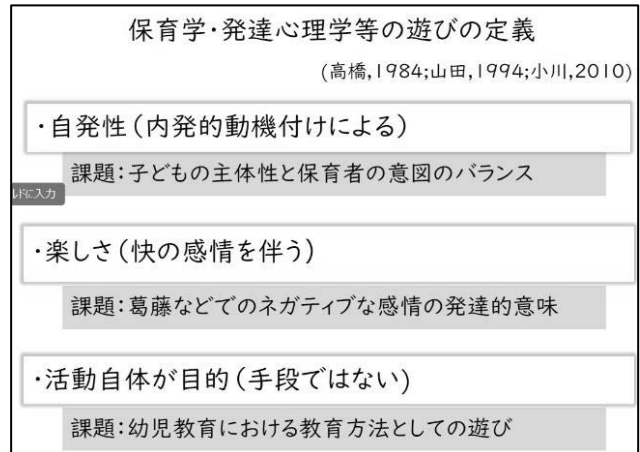
また、楽しさなどの快の感情が遊びの中核にあるとしても、楽しさだけではなく、葛藤や悔しさ、怒りなどのネガティブな感情の経験も重要です。ネガティブな感情の経験が、自分をコントロールすることの発達にもつながっていきます。このことも忘れてはいけません。さらに、先ほどから述べているように、子どもにとっては活動自体が目的ではあるけれど、幼児教育としては、大人の側からすると、遊びは方法、手段でもあるという一種の「ねじれ」があります。この「ねじれ」にどう上手く折り合い付けるのかということも課題としてあります。

3 Play Learning

遊びの重要性に関連して、国際的にも現在、「プレイフルラーニング」が注目されています。プレイフルラーニングの考えでは、遊ぶような形で子どもが学ぶことが学びの本質であるとしています。条件を整えれば、子どもは自然と学び出すとしています。プレイフルラーニングの特徴として、「主体的」「没頭している」「意味がある」「みんなで」「何度でも」「楽しい」といったことが挙げられています。でも、これらの条件を整えれば、子どもはプレイフルに、楽しく遊びながら学ぶとしています。

4 Guided Play

では、どういう遊びの形態が良いのかということはこの図が整理をしています。この図は遊びの形態を、「計画された遊び」か「自発的な遊び」か、「大人主体」か「子ども主体」という2軸の4象限で示したものです。この中で「ガイドされた遊び＝Guided Play」、つまりある程度、大人が計画しつつ、かつ子どもが主体的に活動を選んで遊ぶという形態がふさわしいとされています。日本の幼稚園教育要領でも言われている、遊びを通しての総合的指導というのも、ほぼこの「ガイドされた遊び」の箇所に位置付くと思います。全くの自由遊びというわけではなく、保育者が計画的に構成しねらいを潜ませた環境の中で遊ぶということに当たります。しかし、全てが保育者のねらいどおりになるわけではなく、子どもが主体的に選択し、行動することから、様々な予想していないような活動の展開になることもあると考えられます。



「遊びを通しての指導」という時には、大体、自由な遊びと、Guided Play、環境に関わって生み出す遊びが核になっていくのではないかと思います。ただ、いずれにせよ、保育者がガイドしていくことが重要です。直接指示するのではなく、ガイドする、誘導するという点が、幼児教育における遊びの在り方の重要な点であると思います。

また、レゴブロックで有名なレゴ財団も、遊びを通して学ぶことをとても重視しています。遊びを通して子どもは、生涯を通じて必要となる

幅広いスキルを身に付けるとしています。遊びを通した学びは、特に、恵まれない子どもと、そうでない子どもの格差を埋めると考えられています。このスライドの一番上に『learning Through Play』『Increasing impact, Reducing inequality』とあります。遊びによる効果が高まり、不平等を減らしていくということです。そして、ここでも、自由な遊びとガイドされた遊びの合体が、最も効果的であると述べています。その二つのバランスを取っていくところが重要です。子どもの選択も尊重しつつ、大人がある程度、構造化して、導いていくという側面も外せないと言えます。

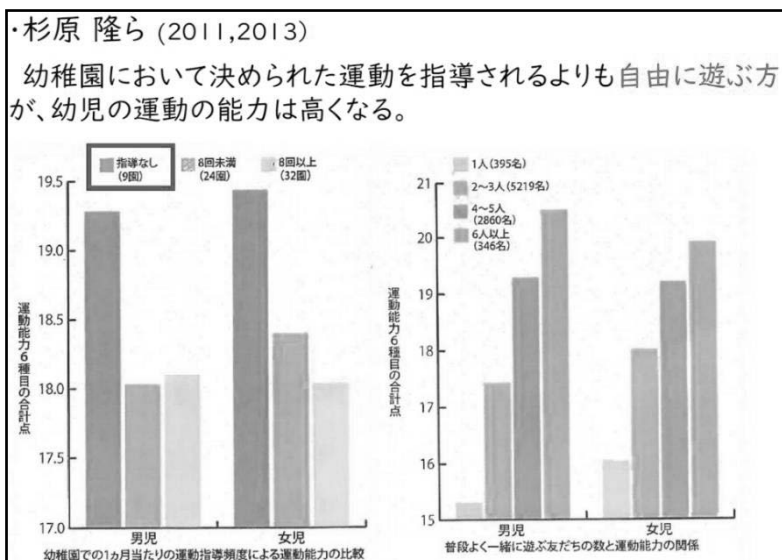


IV 遊びを支える保育者の役割

1 自由に遊ぶ方が運動能力は高くなる

本日この後で、先生方にも議論していただく内容にも関わりますが、遊びを支える保育者の役割について述べたいと思います。これは杉原隆先生たちの幼児の運動能力と保育の形態、指導の在り方に関する研究の結果です。左側のグラフにある「指導なし」「8回未満」「8回以上」というのは、いわゆる「体操の先生」みたいな方が園に指導に来てくださって、「体操の時間」のような指導をする時間が月に何回あるかを示しています。「8回以上」は、週2回以上そのような時間がある園ですね。「指導なし」というのは、そのような時間はないけれども、遊びの中で自由に体を動かしているような園ですね。この図では園の指導形態ごとに、運動能力6種目の合計点を比較しています。結果を見ると、「指導なし」の園の子ども最も、男女共に、運動能力の平均点が高いという結果が出ています。この結果は、この研究が発表された当時も、いくぶん驚きを持って受け止められていたように思います。

体育の専門的な方が来て指導していただくことが、効果がないとか、それが否定されるということではありませんが、この研究で考察されてたのは、



そういう指導の課題として、そのような指導が向いてる子どもいれば、向いてない子どももいるため、苦手意識のある子どもは、ますます苦手意識を持って運動をしなくなることが考えられます。また、今日は「この運動」と決めて指導をする、経験する運動の幅が狭くなる、全員に平等に同じ回数を行わせるようにすると子どもの待ち時間が長くなる、という課題もあります。逆に、「指導なし」の園では、自由に園庭などで体を動かして遊ぶんでいると、その方が、多様な動きを経験し、運動量も多くなると考えられています。

もしかすると、40年前、50年前のように、園だけでなく空き地など地域のさまざまな場所で子どもたちが群れを成して遊んでいた時代であったら、この結果とはまた違った結果になったかもしれません。しかし、今の子どもたちは、基本的に、園に来ないと体を動かさない生活になっています。家での遊びもゲームなど、電子メディアに関わる遊びが増えてきています。そのような園に来ないと体を動かさない状況においては、園でどういう指導形態や活動の影響がとて大きくなっていると考えられます。

右側のグラフでは、よく一緒に遊ぶ友達の人数と運動能力との関係を示しています。この結果はおそらく、先生方も納得できるものではないかと思います。どちらが原因でどちらが結果というより、「相関」を示したものでありますが、たくさん友達がいて一緒に遊んでいけば、集団遊びの経験も多くなり、運動能力の発達を促す集団遊びへの意欲も高まると考えられます。また、運動能力が身に付いてくると、集団遊びの遊びの面白さも分かってきて、友達との関わりも増えると考えられます。そのように、発達の諸側面の関連が見られます。

2 「成績志向」と「遊び志向」

杉原先生はこれに関連して指導形態だけでなく、「成績志向」「遊び志向」についても述べています。これは子どもが生まれつき持つ傾向などではなく、単純に、身近な大人の価値観であると言えます。大人がどのような志向性で活動を指導するか、活動展開するかがで、子どもに与える影響は異なることを述べています。

「成績志向」というのは、「できる／できない」「上手／下手」や、他者との比較での優劣や勝ち負けを重視するものです。「遊び志向」は、自己決定した自分のやりたいことをやり遂げる努力、自分なりの進歩、向上することを重視するものです。成績志向は、どちらかという結果を重視する。遊び志向はプロセス、過程を重視するとも言えます。それぞれが子どもに及ぼす影響を見ると、成績志向では、無力感と、高い不安、苦手意識につながっていきます。低い規範意識と道徳性というのは、要するに「勝てばいい」という発想になってしまうということです。一方、遊び志向では、高い有能感と満足感、運動意欲、良好な仲間関係、高い規範意識と、道徳性につながっていきます。これらはいわゆる「非認知的能力」に重なっています。

幼稚園教育要領での幼児教育の基本的な考え方としては、幼児期は遊び志向でプロセスを重視して、一人一人が自分なりに、やりたいように、自分なりの進歩を遂げていくことを重視しています。もちろん、4、5歳ぐらいになると、「できる／できない」や、勝ち負けにこだわる子どもの姿も見られると思います。そのような姿も発達としては必要な姿であると言えますが、それだけに偏り過ぎてしまい大人が成績志向だけの指導していくと、子どもに良くない影響が出くると言えます。

子どもの活動を捉えていくときに、何かができたときや、勝ったとき、一緒に喜んであげたりとか、褒めてあげたりすることも重要です。しかし同時に、子どもの活動のプロセスをしっかり見て、関わることも重要です。特に5歳ぐらいになると、縄跳びや鉄棒だ、太鼓橋、コマなど、ある程度練習しない

と身に付かないものも経験します。竹馬や一輪車などを行っている園もあると思います。その時に、何かができた時だけ褒めていたら、子どもはそのような価値観になってしまいます。けれど、できるまでの過程で、仮にできていなくても、その子どもが頑張っていること、その子どもの良さが出ているところをしっかりと認めることが、重要だと思います。

子どもが鉄棒の逆上がりなどを練習してるけどなかなかできない時もあると思いますが、その時にも、逆上がりが出来た時だけほめるのではなく、まだできていない場合にもその姿を認めることが大切だと思います。例えば、帰りの会とかで、「今日先生、園庭でみんなが遊んでる時に見たんだけど、〇〇ちゃんが鉄棒の所で何回も何回も逆上がり練習してたよね。何回も何回も挑戦しててすごい頑張ってるなって思ったよ」とか「素敵だったよ」って言ってあげると、子どもはまだ逆上がりはできていないけど、挑戦してる、努力してる自分は素敵なんだって自分自身のことを受け止めることができます。そういうことを伝えていくことが、とても重要ではないかと思います。また、「そのお隣で、△△ちゃんがこうやって持つといいよとか、教えてあげてたよねって。本当の先生みたいでそれも素敵だなって思ったよ」と、他の子どもの姿も捉えて、伝えることもできます。

遊び志向でプロセスを見ていくと、子どものさまざまな良い姿を保育者が見つけて認めていくことができます。「褒めることが大切」と言いますが、保育の中で子どもの姿を認めるときに重要なことは、子どもが自分でも気付いてない良さを伝えることだと思います。子どもが自分で分かっている良さを伝えることにも意味はありますが、子どもが自分で気付いてない良さや友達の良いところを「素敵だね」とどんどん保育者が伝えていくことが、とても重要だと思います。逆上がりならば、「昨日よりはお尻がぐっと持ち上がってる時あったよね」のように、ちょっとした進歩を認たり、「来週ぐらいにはくるって回れそうじゃない？」のように「良い予言」をすることも大切だと思います。当たるか当たらないか、どちらかは分からないんだったら、良い予言、「良い呪い」をどんどんかけていくことも大切だと思います。そのようにして、保育者の言葉かけの意味は、そういうところにあると思います。

3 遊び込む経験

また、遊び込むことが重要であると言われています。これはベネッセの研究総合教育研究所の調査結果を示しています。園で遊び込む経験を多くしている子どもの方が、「学びに向かう力」は高いという結果です。単に遊んでるというのではなく、夢中・没頭してるかどうか重要です。協同性とか、頑張る力、好奇心などのいわゆる非認知的能力に重なる力も、遊び込んでいることが多い群のほうが、得点が高ことが示されています。

ただし、現在は、在園時間がとても長くなっています。1日11時間程度、園で過ごす子どももいます。園でずっとずっと10時間、11時間、夢中・没頭してることは現実的ではないし、どこかでぼーっとしたり、リラックスしたりする時間も必要です。したがって、1日の園生活のどこかで、とても遊び込んで、夢中・没頭した経験が生まれるように、保育の計画、一日の流れを見直していくことが重要だと思います。

幼い頃に「あれは楽しかった」「すごく夢中で遊んだ」という思い出は皆さんにもあると思います。そのような経験が今の自分の何に繋がってるのかはあまり上手く説明できないかもしれませんが、しかし、その時の充実感や達成感のようなものが自分の核になっているという感覚はあるのではないかと思います。充実感や達成感みたいなものは、自分が自分であるという感覚の芯になっていると思います。泥遊びをたくさんして本当楽しかったとか、鬼ごっこで汗をかいて一生懸命走って面白かった、ブロックを

とても高く積んだとか、そのような充実感、達成感が持てるような遊びになっているかと考えることがとても重要だと思います。

4 子どもの挑戦の保証

秋田（喜代美）先生たちが実施した実践研究の報告書でも、「認知的に高い挑戦、チャレンジングな活動の保障が、いい園をさらに優れた園」とあります。最初に示したこども家庭庁の資料でも安心と挑戦の循環が大切であるとありました。子どもの遊びに挑戦があるかどうかはとても重要です。また、「居場所感と共に、長い活動時間に夢中没頭することが、学びの対象との深い関係や、感情につながり、愛着等を生み出す」ともあります。したがって、幼児教育では、チャレンジしたいと思える意欲を育てることが重要です。意欲は放っておいて出てくるわけではなくて、身近な環境や教材に影響されることから、環境や教材を考えることが必要になります。

現在は、保育時間だけでなく、保育年数も長くなってきています。3歳未満児の時から同じ園にずっと通う子どももいます。そうすると、4、5歳ぐらいになると、園にある環境は大体、一通り、特に戸外環境などは遊び尽くしている状況も生まれてきます。したがって、いかに子どもの挑戦を生み出すかを、特に5歳児頃には、かなり保育者が考えていく必要があります。子どもの遊んでいる姿を見て、そこに挑戦はあるか、探求はあるかと問うていくことが重要です。

5 学びや指導の充実と教材の充実

平成 29 年の幼稚園教育要領改訂の前段階の審議の取りまとめでも、「教科書のような主たる教材を用いるのではなく、体を通して体験的に学ぶ幼児教育では、幼児が主体的に活動を展開できるかどうかは教育の環境の構成にかかっており、教員が日常的に教材を研究することは、極めて重要である」と述べています。「継続的な教材研究」が重要であると述べています。

遊びを通しての教育の意義は、幼児教育関係者は分かってるけど、違う分野の人や世の中の人にはなかなか理解されづらい現状があります。保護者の方にもなかなか理解していただけないところもあるかと思っています。遊び自体は、子どもは家でも遊び、休日に公園行っても遊び、夏休みにはテーマパークに行っても遊びます。世の中の人々からすると、子どもはどこでも遊んでいるのにどうして幼稚園、保育所、認定こども園の遊びは「教育」と言われ、そこにたくさん税金がつぎ込まれるのかという素朴な疑問も生じるかもしれません。

その時に「園の遊びは教育です」と言える根拠は、保育者が計画的に構成した環境の中で、保育者が継続的に研究している教材で遊んでいるからということです。そこは先生方が、なぜこの教材なのか、なぜこの環境なのかっていうところを常に振り返って研究していくことが、大切になります。このことを反映して、平成 29 年の幼稚園教育要領の改訂でも「教材」という言葉が初めて盛り込まれました。保育現場では「教材」という言葉は従来から使われていたと思いますが、また、保育所保育指針では「教材」という言葉は使っていませんが、従来から環境を工夫することについて述べられています。

6 教材研究のために

最後に、様々な園の環境の写真を先生方に見ていただいて、「この写真にはどういう工夫があるのかな」と考えていただければと思います。

〔写真：電車のおもちゃで遊ぶ子ども〕これは3歳の子どもの夢中になって遊んでいることが分かると思います。単にこの子どもに集中力があるとか、この子どもはとても電車が好きなんだなという理解で終わるのでなく、こういう姿が生まれる時に、どのような環境の工夫があるのかと考えることが大

切です。先生方はプロフェッショナルなので、この写真をぱっと見た時に、気付いたことを挙げてくださって尋ねたら、おそらく5つぐらいはぱっと出てくると思います。同時に、子どもが夢中になると、このくらい集中して取り組みますよということもちゃんと親御さんにも伝えていけると良いと思います。

〔写真：4歳児クラスのクレヨン画〕これは、あるこども園の4歳児のクレヨン画です。「タンポポレストラン」って書いてあります。見ていただいて分かるように、紙に予め「おなべ」「ランチプレート」「お弁当箱」が描いてあり、紙の色は水色、ベージュ、レモン色、白色と4色あります。したがって、子どもは3×4の12パターンから、選ぶことになります。個人差もあると思いますが、例えば「クレヨンで描いて表す楽しさを味わおう」というようなねらいであった時に、「子どもに白い紙に何でも好きなものを描いていいよ」って言って、描ける子どももいるかもしれませんが、それだと逆に何を描いたらよいかわからなくて描けない子どもがいるかもしれません。子どもはみんな食べ物が好きで、食べ物に関心があるので、このようにおなべやランチプレート、お弁当箱が描いてあると、イメージが持ちやすくなり、イメージが広がりやすくなると思います。「何にしようかな、何色にしようかな」と選ぶ、その自己選のプロセスがあると子どもの意欲も高まる。子どもの絵を見て面白いと思うのは、ランチプレートの枠とか、コンロの火とか、細かい所を子どもが塗っているところです。枠や見本があることで逆に、子どもが描きたくなる意欲を引き出す可能性もあるということですね。そのような工夫していくことが大切だと思います。

〔写真：秋の素材を用いた制作〕これはコロナ禍のあるこども園の写真です。木の実などの秋の素材を用いて制作を行う際に、このようなビュッフェ形式のように、自分で好きな素材を選んで、自分のテーブルに持ってきて作るという形式で行っています。この子どもはバースデーケーキを作っています。このように子ども自身で選べるということがとても重要です。そのような経験が豊富にあることが、必要だと思います。

〔写真：園庭の花壇を椅子に座って眺める子どもと保育者〕これは、都会の園の園庭での様子です。それほど自然豊かではないですが、こういう小さい椅子があるだけで、自然物を眺める際の動きが変わります。座ったり、しゃがんだり、立ったりなど、体の動きによって対象への向かい方が変わることを、我々知っておく必要があると思います。

また、戸外に行く際に、虫捕り網や虫籠、採取した物入れるビニール袋など、そのような物があるかないかで、子どもの対象との関わり方が異なってきます。虫を捕ってからビニール袋や透明カップを用意するのと、先に透明カップやビニール袋を用意しておいてから戸外に行くのとでは、子どもの動きは変わってきます。

〔写真：廊下で忍者ごっこをする子ども〕これはとても広い廊下のあるこども園での様子です。保育者がハードルのようなような飛び越える遊具を作り、3歳児がそれを忍者の修行風に飛び越えて遊んでいます。このような遊具があると、さまざまな動きが引き出されます。これはロール芯で作られていて軽いので、子どもたちだけで動かしたりできます。巧技台は重いですが、このような自分たちで動かせる遊具があると動きも変わってきます。

〔写真：園庭のプランターの花を摘む子ども〕これは都内の幼稚園のプランターで、「○遊びに使える草花」と書いてあります。このように○印がついていると、摘んでも良いことになっていて、4歳児の男の子たちが摘んでいます。摘んだ草花を入れている黄色の容器は、牛乳パックの一番下の部分を切っ

て、黄色のビニールテープを巻いたものです。この容器がいくつも用意されていて、子どもたちは戸外で遊ぶ時には、必要に応じてこれを自由に使っています。この園は都会の園で園庭はあまり広くないですが、これだけの遊びに使える草花がプランターに同時に植えていることが分かります。また、摘んだ草花はこのように保育室に飾られています。このように花を水に浮かべるのも表現ですね。紙に描くだけが表現ではなくて、水に浮かべるのも表現となります。水に浮かべることは、あまり技巧を必要とせずにはできますね。それらをこんな風に保育室に置いておく。きれいな物とか、繊細な物は、きれいに、繊細に置くのが子どもの感性を育てていく上では大切です。保育室に置いておくことで、保護者の方にも見ていただくとかできます。

〔写真：秋祭りのアクセサリ屋さん〕これは、秋祭りがすごく盛んな地域のこども園の写真です。5歳児の秋祭りごっこの様子です。出店の看板には、いろいろな伝えたいことを文字で書いています。これはアクセサリ屋さんで、このような感じで指輪を売っていました。これを見て分かるように、きらきらしたもの、かわいいもの、すてきなものに対する子どもの食欲さは、底を知らないかのようです。しかし、それを引き出すには、それを実現する素材を出すことがとても重要です。この写真にあるように、二つとして同じ指輪を作らないところがすごいと思いますが、ロール芯を使った指輪置き場などのアイデアといった工夫によるところも大きいと思います。このアイデアは保育者が出しているのではないかと思います。

〔写真：さつまいもに関する壁面や描画〕秋の「さつまいも」に関する壁面や描画をいくつかご紹介します。これは『おおきなおいも』イメージで、みんなでダイナミックに塗りをしています。別の園では、同じ時期に経験画を描いていました。おそらくいも掘り遠足に行った後に経験画を描いたのかと思います。見ていただいて分かるように、かなり大きな画用紙に、皆同じ構図で絵を描いています。同じ構図で子どもに絵を描かせる場合、保育者の意図がはっきりしている必要があると思います。でも、見ていただいて分かるように、それぞれの絵の地面が繋がるように掲示すると、「みんなでいも掘り遠足行って大きいお芋を掘ったね」という思い出が想起されるような感じがします。紙は大きいんですが、それぞれの絵を見ると、地面に埋まっているさつまいもの表現や紙いっぱい使って描いているところから、保育者の意図と子どもの実態が合っていたように思います。これは5歳児のさつまいもの描画です。これは、イメージによる描画でもなく、経験画でもなく、写実をしています。対象をよく見て描く、よく見て表すということをしています。その題材としてさつまいもを描いてる。したがって、使う画材も変わってきます。細いペンや、微妙な色が出る水彩絵の具を使っています。また、よく見て描く時に、何を題材とすると良いかと考えると、確かにサツマイモなどの野菜は適していると思います。その理由として、同じさつまいもでもそれぞれに形や色が微妙に異なり、見れば見るほど染みとかひげなど、面白い箇所がたくさんあります。野菜などの自然物は「観察に耐える」というところがあります。だから、写実的に描く対象として、さつまいもを描いているとも考えられます。また、絵に添える名前の書き方も赤い紙に白で印字してあり、「画伯」の印のような感で工夫しています。

〔写真：運動会の経験画〕最後に、あるこども園の運動会後の、5歳児の経験画です。運動会でリレーを行ったことが分かります。この子どもはリレーに参加したおそらく全員の子どものように描いています。水色の紙に描いていたので、担任の先生に、「どうして水色の紙なんですか」と尋ねたら、その先は、「いつもは好きな格好で園に来ていますが、運動会の日だけは白いシャツと紺色の短パンで服装を統一してたので、子どもはきっと白いシャツ描くだろうなと思いました。また、リレーをしたので、

リレーのトラックの白いラインも描くだろうなと思いました。だから白い紙じゃない方が良いかなと思います、また青い空の下でみんなで活動したということもあり、水色の紙にしました」とおっしゃっていました。それが正解かどうかは、また別の問題であると思いますが、少なくとも、保育者がそのように説明できることがとても重要です。保育者の願いや思いと、子どもの経験や描きたい意欲がどう重るかが重要です。この絵を見ると、クレヨンでよくこれだけの人数を描いたなと感じます。5歳になるとこれだけ細かく描き分けられるということが分かります。そうだとすると、次に経験画を描く時には、もっと大きい紙が良いのか、クレヨンではなくマジックのほうがいいのかなど、画材等を工夫することに繋がっていきると良いと思います。

長くなりましたけれども、私からは以上になります。

Ⅱ グループダイアログ

任意のグループに分かれて、参加者が持参した事例や日常の保育話を中心に語り合う。その際、5～6人でエンタクン（円卓状の書き込み用紙）を囲み、語りながらメモや記録のようにどのような事でも良いので記入していく。ダイアログの後には、参加者が他のグループでの話し合いも見られるように、全てのエンタクンを壁に貼り付ける。

1. 各グループの報告

皆さん、グループでの語り合いはいかがでしたでしょうか。各教室に付いていた教員から、語り合いの内容を少し共有させていただきます。

C208のグループでは、たくさんの事例が登場しましたが挙げ切れないので。例えばですけれども、3歳児がとても暑い中で、子どももセミ捕りをしたい先生もさせてあげたい、しかし、熱中症が心配だ。そんな中でどうするかみたいな話ですとか。ごっこ遊びの事例ですとか、廃材でいろんな物を作って遊んでいる事例ですとか、そういったものが出てきました。

どんなことが話されたのか、私の印象に残っていることを中心にお伝えしたいと思いますけれども。まずは、信頼関係が大切なのではないか。楽しい雰囲気、温かい感じ、安心できる感じ、応答できる感じというもの。それから、子どもたちのやってみたいという気持ちがどんなふうに表れるか。環境でやってみたいことが変わってくるのではないか。環境の中で、大人が知らないうちに、もちろん、環境は保育者がつくっているわけですから。その中で、大人が知らない、私たちが知らないうちに育っているものがある。子ども同士の関わりの中で生まれているものがある。自由な中で生まれてくるものがある。そういったところが大事なんじゃないかというような話が、たくさん語られました。

その中で私、感じたのは、十分に先生がたが子どもたちと分かち合って保育をつくっている。自分のプランだけではなくて、子どもから出てきたやってみたい、それと、自分たちがやってみたいということが十分に絡み合った形で、ガイドされている。そんな様子が伝わってきたように思いました。ありがとうございました。

C206会場の発表をしたいと思います。こちらの部屋のグループ、非常に幅広い話題がありましたので、かいつまんだお話になりますけれども。自由とは何かと、非常にテーマとしては深い話なんですけれども。自由保育だったり、一斉保育だったり、いろんなやり方の、進め方の園の、先生がたのグループがあった中で、自由とは何かという話が出ていました。主体性とも関係する、能動的とも関係するような言葉だと思いますけれども。その中で、子どもたちの自由を求めて、主体性がある、ないで、悩みというか、考えを巡らせているグループがありました。

それとも関連する内容かとも思うんですけども。子どもの興味、関心というのを継続させていくことについて、どのような進め方、日課の作り方をしていくのかといったことをテーマに挙げていたグループもありました。その中で、保育の質というようなキーワードも出ていたかと思います。

その他、いろいろと気になる子が多いというようなお話もあり、そういったところでは、それぞれというところで視点をあげていくことも大事なんですけども。差別のない中で、区別のない中で、保育

をすることを考える方が、逆に、保育者としても楽に、子どもたちに余裕を持って接することができるんじゃないかといった意見が出ておりました。

その他、園の職員間の共有というか指導というか、そういった話の中では、自分の先輩、上の先生、上司からの指導だけではなくて、いろいろと、例えば、飲み会であったり、こういった研修会の中であったり、いろんな方との触れ合いの中で、いろんなお話を通して成長していくということも少しあるのでということが、グループ内に共有されていたといったようなお話もありました。私からのお話も雑多で申し訳ないんですけども、以上で報告を終わりたいと思います。ありがとうございました。

次のグループですけれども。人数間の関係で、4グループに分かれて自由にお話をさせていただきました。この教室は割と、本当に日々、一生懸命、保育、子どもと向き合ってやってらっしゃる中で、でも、いろいろ課題もあるよねっていうところが、それぞれのグループの中で、事例も込めながらお話が出てきたかなというような印象があります。

例えば、子どもの発達をいかに支えていくかという中で、当然、保護者との連携があるわけですから。保育の仕方も含めて、今と昔の違い、先生方も異年齢で今回、集まっていたいただきましたので、非常にベテランの先生と若い先生が集まった中で、違ってきたよねというような中で。非常に具体的な、トイレトレーニングであったり、食事のことだったり、すごく求められることが多くなる中で、でも、日々、保育の意図を持って、どうやっていったら良いのかが、非常に現実的な課題というか、難しさ。設定から自由保育へと変わっていく中でも、人的環境、物的環境も含めて、やりたいことはいっぱいあるんだけど、なかなか難しい。人手も足りないよねという、本当に現場の声が聞かれたかなとも思います。

そして、今の時期、夏季保育もありますので、そういう意味で各園、どういう風になっているのかの情報共有もございました。今は異年齢での遊びが中心になっていくわけですが、ゼロから2歳、3歳から5歳。ただ、子どもたち、異年齢といっても体格差であったり、あるいは、非常にいろんな個性を持ったお子さんが増えてくる中で、空間であったり、おもちゃの数であったり、決まった環境をいかに工夫して、一人一人向き合っていくのか、保育をしていくのかというようなところでありました。

そういう中で、最初の（砂上）先生のお話を受けて、安心と挑戦の繰り返しが大事だっていうところの確認ができた。そこからのいろんなお話し合いもあったんですけども。自分たちのいろんな事例も出しつつ、保育者として本当にいろんな経験を子どもたちにさせたいし、子ども主体の遊びに取り組んでいきたい。ただ、現実として、園によって行事であったり決められた活動があって、とにかくやらなければならないことが決まっている中で、どんな風に子どもたちに提供していったらいいのか。バランスをよく取り入れていくというところで、いろんな葛藤があって。でも、そこで諦めずに、バランスよく取り入れていきたい。それを目指す保育をしていきたいというようなお話がありました。

そうした中で、行事、活動の話が各グループ出てきているわけですが、それをどういうふうに関園やってるのか。行事活動も大事だけれども、それが子どもの遊びを邪魔していないだろうか。遊びの保障、遊びを充実していくという中で、行事の活動を見直していく勇氣、仕分けをする勇氣というものも必要じゃないか。ある園では、運動会はやめましたなんていう情報提供もございましたけれども。そうした時に、保護者の方からどういう話が出てくるのかも、現実的に皆さん、興味のあるところだったようです。その場合には、園長からいかに保護者へ、自分たちの保育というものを発信していくのか。

保護者と共有しながらやっていかないと、なかなか一方的にやっていくということは難しい。ただ、結論としては、本当に園が子どもにとって楽しい所でなければならない。運動会の練習がつらくて、嫌々、園に来るような子をなくしたいし、楽しくなければ園じゃないという中で、どんなふうな形で保育者が、日々の保育、そして、保護者とも含めて、やっていけるのかというような問題提起が出てきたように思います。以上です。

最後のグループの話をさせていただきたいと思います。このC207のお部屋は、すごく書いているものも個性があふれているなという感じがして、見させていただいていました。環境図を書いているところがあったりとか、保育ウェブで書いていくところがあったりとか、なかなか書き進まなくて、どうしようかなというところがあったりとか。そういったそれぞれのグループにも色があるっていうのが、見ていて面白いなという風に、最初、感じていたところでした。年齢も経験も、そして、対応している子どもたちも多様なさまざまな対象がいて、さまざまな人たちがいてという、本当に違う人たちが集まって、いろんなことを話しているっていう状況だなと思いました。

それぞれで、大きくテーマとして、こういう話が出てきたよという風に出てきていたものが。例えば、遊びについて。でも、遊びというのは、乳児のクラスから考えると、愛着だったりベースにあって、そこからの、遊びなんだというお話になったり。そこで教師の主体性が強過ぎるのも良くないんじゃないかって。そういう意識を持っていたいというお話や。子ども主体の保育っていうのがあるのと、あと、自由な保育っていうのは、どう違うのかを考えたっていうことや。先ほども出ていたようすけれども、行事においての子どもの主体性ということについて考えたっていうこと。

どんな遊びをしているかという話から、環境であったりとか、コーナーであったり、その制限っていうこと。その制限がある中での主体性をどうしていくかっていう話であったり。個性がある子がたくさんいたりで大変だという話から、でも、ない子はどうか。ない子って考えていたら、お話聞ける子でいいのかとか、いい子っていうことは何なんだろうっていうことであったりとか。そして、その答えが、結局、その中では出なかったけれども、この後も考えていきたいっていうつながりが出ていたり。

全体とつながっているなと感じたのは、子どもの思いに合わせてとか、主体的な保育には、心の余裕っていうものが必要だとお話ししていたグループですね。そのためにはどんなことが必要か。コミュニケーションであったりとか、保育者の人数であったりとか、行事のことだったりとか。その余裕があることによって、姿に合わせて、臨機応変に対応できるというお話がありました。こういうお話を聞いていて、余裕って遊びっていう意味だよなとも思って。すごく、さまざまなものに遊びがあるということ。私たちにも遊びがあるということが大事なんだなと、聞いていて思ったところでした。以上です。

2. グループダイアログを受けての砂上先生のお話

皆さん、語り合いお疲れさまでした。私も様子を見せていただきながら、グループダイアログで、グループで円になって、膝を付寄せた真ん中に円卓を置くという工夫があって、環境とか教材の工夫が先生方の様子にも感じられました。(話し合いの内容が書かれたエンタクンが壁に) 貼られているものを一通り見させていただいて、グループでどういうことが話されたのかが、文字が書かれては行間にも表れているように感じます。各グループの話の痕跡を、とても興味深く見させていただきました。実際、それぞれの現場でお感じになっていること、さまざまな制約や課題についても書かれていて、それ

等を通して、先生方が毎日、いろいろ工夫や苦心をされていることを感じました。

保育の質を支える保育者のあり方

今の（グループ毎の）まとめのお話から、各園で保育のやり方とか、保育の形態とか、長期計画で決まっている活動とか、様々なことがあるので、抜本的に大きく変えていくことはとても難しい場合もあると思います。それを踏まえた上で、最後に一つ、保育の質を支える保育者の在り方についてお話できればと思います。一斉保育であれ自由保育であれ、あるいは遊びであれ行事の活動であれ、大事なことは、目の前の子どもの姿に応答していくこと、子どもの姿を丁寧に捉えていくことであり、それが基本にあると思います。

その際の保育者の専門性として、一つは、情性に流されない意思の力と、微妙な違いを見分け聞き分ける繊細な感性の2つがあると思います。保育は、ルーティンとして同じ活動が繰り返されることが子どもの安心感につながっていきませんが、子どもにとっては毎日が一日で、保育者にとっても毎日違う一日であるはずで、津守真先生は、「体を動かす作業においては、心身とも疲労せずに済ませようとする、保守的、保身的、衝動的な人間の傾向が優先しやすい。その情性を途中で引き止めて、初心の原点を思い起こさせる力を必要としている」とおっしゃっています。これは本当に、日々、かみしめておきたい言葉だと思います。疲れが溜まってきたり暑かったりすると、また忙しさの中で、ついつい情性に流されるというのが人間だと思います。

しかし、そこで立ち止まって、子どもが何か求めてきたときなどに、子どもの姿を丁寧に見てみようとするところに保育者の専門性があるのだと思います。したがって、そこで子どもの声を聞き分けていく、子どもの姿に応じていくことで、子どもの主体性をうまく引き出すことに繋がると思います。

行事や一斉的な活動では、活動の大枠は決まっています。しかし、そこで子どもが活動に夢中になれるかどうか、活動を楽しめるかどうか重要です。子どもが主体的に行動するかどうかは、保育者が目の前の子どもの姿に応じているかどうかと関連していると思います。子どもの声を聞き分け、子どもの姿を受け止めていくと、子どものこういう姿があるから、もう少しこういう風に活動や援助を工夫してみようというふうに、保育を変えることになり、それが保育の質の向上につながっていくと思います。

子どもの声に耳を澄ますとしても、同時に「保育のねらいが達成したか」どうかという、評価もまた避けられないことではあると思います。保育の実践を自己評価したり、他者からの評価を得たりすることで、保育の質は向上していきます。しかし、一方で、鑑賞という、保育を味わう姿勢もとても大事だと思います。生活の潤いとか、奥行きとか、肌理みたいなことを、どれだけ重視していくかが重要です。生活を味わうような余裕とも言えます。それが保育の質にもつながっていくと思います。

ここにリンゴの画像が四つ並んでいます。どれも「赤いリンゴが木になっている」と描写することができます。でも、微妙にちょっとずつ、絵画風であったり、モザイクであったり、ガラス越しにようであったりと、微妙に、表し方が違います。その違いを味わい、楽しめるかどうか、保育の大切なところではないかと思います。どうしても、忙しさや、安全面等の優先事項があると、活動を決まった手順で、つつがなく行うことが優先されてしまいます。

でも、そこで、子どもにとってはこの一日は、昨日でも明日でもなくて、今日、今、ここが大事なんだと保育者が捉えて、一緒に味わうような姿勢が重要だと思います。保育者が味わう姿勢を持ち、そのような姿勢による関わりが積み重なっていくことで、遊びの質も変わり、保育の質も変わると思います。その意味で、このスライドに書いてあることを、先生方の心に留めていただけると嬉しいです。

今日、いろいろお話ししましたが、子どもが保育の中で、遊びを通してわくわくしたり、ドキドキしたり、楽しいっていう気持ちになるためには、保育者自身が今、目の前にあることにわくわくしたりドキドキするってことが大事だと思います。そのような「味わう姿勢」、丁寧に子どもを捉えることを、情性に流されずに、一日の保育の中でも一回でもいいから、思い出していただけると良いと思います。

まとめとしては、少し広がった形になりましたが、私からは以上になります。先生方、本日は本当にお疲れさまでした。

以上
(文責 鈴木幸子)